

平成29年度第1回北海道科学技術審議会 部会 議事録（暫定版）

日 時：平成29年5月9日（火）16：50～17：30
場 所：かでの2. 7 5階 520研修室
出席者： （委員）尾谷部会長、荒川委員、大倉委員、西岡委員、長谷山委員、菅野特別委員、佐々木特別委員、末富特別委員、一入特別委員、松村特別委員 （事務局）青木室長、木下参事、小林参事

尾谷部会長	先程親会議の方で皆さんの御意見頂きましたけれども、言い足りなかったことなどはないでしょうか。いかがでしょうか。
一入委員	言い足りないというわけではないのですが、私自身の違和感なので確認させて頂きたい。人材育成という言葉が皆さん頻繁にお使いになっていたのですが、ここで言われる人材育成の対象は小学生から入るのでしょうか。初等教育という話もあったんですが、私が最初にこの計画の話聞いたときは、大学生、あるいはそれ以上の社会人を対象にして、ビジネス等々を推進していくための人材育成というイメージだったので、小中高という話がでたときに違和感を感じました。その前提が是か否かをちょっと伺いたいと思います。
木下参事	人材の中には仰るとおり、研究者の育成ということもありますし、あるいはマネジメントをする人の育成という点もでてくるので、そうゆう幅はありますし、世代的には、我々サイエンスパークなどもやっておりますので、小学生、あるいは研究者などそういったものを全て含めて人材育成の対象として捉えております。
一入委員	小中学生も視野に入れた上での様々な人材育成どのように進めていくか、5年、10年後にどうゆう人材を求めるかを考慮する必要があるということになるのでしょうか。 サイエンスパークとか啓蒙することに対しては全く異論はないのですが、基本的な事業計画というか、道の5年、10年先の計画を立てるときに、5歳、6歳あるいは7歳、8歳の子が10年後に17、18歳、そのときの人材をどうするって議論をしてもあまり意味が無いと思ったので、確認させて頂きました。
尾谷部会長	事務局のことをちょっと補足しますと、子供たちも対象とするというのが総論であって、各論としてどこに重点をおいて、向こう5年何をするのかというのがこれからの肉付けの話で、捉え方としてお子さんを持っている人にとってはそうゆうのが目につくでしょうし、実際に企業をやってる産業界の人たちから見ればその部分の人材育成がどうなるのか、そこに入ってくる大学生等に対して道はどうゆう方針を持って科学技術者を育成しているかという見方が入ってくると思うんですね。ただ、全部を決まった予算・人材で5年間で出来るはずもないので、具体的な中身に濃淡がでてくるとは思うんですけど、道として書き物の書き方としては、ここを排除していますとかではなく、シームレスにならざるを得ないということですね。
木下参事	先程の資料で申し訳ないですけども、参考資料1として条例を添付してございます。 条例の第15条なんですが、人材の育成等及び道民の理解の増進という括りで、一入先生が仰るとおり、「道は、国等の関係機関と連携し、学習の機会の充実、科学技術に関する啓発及び知識の普及等により、科学技術を支える人材の育成及び確保並びに道民の科学技術に対する理解の増進を図るため、必要な措置を講ずるものとする。」という記

	<p>述になっておりました、基本は先程申し上げましたとおり、全てを含んでおりますが、施策の濃淡、あるいはどのような施策にするかという議論だと思いますので、そういう部分を踏まえて御議論頂ければと思います。</p>
菅野委員	<p>今の関連なんですけれど、業界としては、我々も人材不足が大きな問題になっていて、実際に小学生とか中学生とか子供たちにプログラミングを教えたりですとか、何かやろうよという動きはあるんですね。そういったことはやってるんですけども、この施策にそういうのを強く盛り込むと、そういうところに予算付けがされると考えても良いのですか。</p>
青木室長	<p>例えば科学技術振興条例・振興計画には当然教育も関わってやって頂いております。ただ、この場での議論が直ちに予算へ反映できるかといわれますと、すぐには出来ないかもしれません。ただ、我々これからここでの議論を踏まえ、計画をまとめるにあたりましては、庁内での調整を計った上で最終的に出していくこととなりますので、審議会でも初等教育・中等教育における科学技術の理解促進というものをもっと進めるべきだ、具体的にこういうことをやるべきだという話があったときにはですね、どこまで取り込めるかというのは調整を計る必要があります。</p>
菅野委員	<p>分かりました。業界的にはそういうの非常に危機感を持っていてですね、会社として、業界として色んな形で費用をそこに割いて、実際にそういったことも行っていき、これからも強化していこうと思っています。逆に働き方なんかでもですね、働き方改革にトライしてまして、就業規則であったり、ITは非常にテレワークなんかもやりやすいものですから、そういったところをやればいいのかですとか、実際にテレワークの実証実績とかやるとですね、様々な問題がでてくるんですよ。そういったものをどうやって解決しようか、民間レベルでは結構やっていますんで、是非どういったものを分かって頂きたい。</p> <p>あと先程言い忘れてしまったのですけれども、我々IT業界に対する科学技術振興というのかな、業界に対する費用というか、例えば業界を活性化させるために何かやるとか、そういうふうにも考えても良いものなのですか。</p>
青木室長	<p>一番好ましいと思っておりますのは、正直なところ我々も予算的な制約もありますし、人的な制約もあります。それは先程の教育の問題も含めてそうなんですけど、そういった中で、IT業界が子供たちに向けて勉強の機会を与えるとか、普及啓発の取組をして頂けるというのは非常に有難いと思っておりますし、そこに例えば我々の方で枠組み、教育盤みたいなものを用意できれば、一緒にやれば、効果はもっと上げられるだろうと考えていますので、例えばITの業界として今後こういうことが課題で取り組んでいこうというものがあつたとして、そこに行政が施策として、もう少し環境整備をしてくれとかですね、そういうものがあれば、一緒にやることであれば、効果を高めることができるだという考え方で考えていきたいと思っています。</p> <p>ですから、計画を作つてこの部分は絶対やってくださいというものではなくて、そこは役割分担を考えていて、産業の役割、行政の役割などを最終的に基本計画の中で、先程誰が誰のためにという議論もございまして、どこまで明確に書けるかという問題もありますけど、役割分担が最終的に出来ていければと考えています。</p>
菅野委員	<p>要するに大きく、議会も含めて、こういう方針でいこうというのを出して、それに対して具体的にこういうこともやろうよというの、業界も含め色んなところから出てきて、動くというイメージなんですね。</p>
青木室長	<p>例えば菅野委員がこういうことをやるべきだというのがあつたとしてですね、その具体的な予算付けまで出来れば宜しいですけども、</p>

	<p>当然我々にも制約というものがあり、その中で、計画としてこうゆうものには今後 5 年間取り組むべきだというものが出たときに、私たちがどこまで出来るかという話になります。</p>
佐々木委員	<p>今年初めての委員なので、少し視点がずれているかもしれないですけれども、ここで議論されることはすごく先進的な技術の話が圧倒的に多くて、それを民間で利用してどんなふうに普及させていくのかという議論が弱いような気がしたんですね。</p> <p>一番気になったのは奨励賞とかもほとんどが大学の先生ばかりで、それを実際に活用した民間の方とかの表彰はどうかのところがですね、そういう先進的なものだけではなくて、具体的にそれが民間で利用される、それから住民がそれを利用するという部分の科学技術の振興が全体を見たときに弱い気がしたのですが、その部分についてはこの審議会の中で入り込んで良い部分なのではないでしょうか。</p>
尾谷部会長	<p>先程から親会議の方でも議論になってきましたけれども、2面あるんですよね。北海道の科学技術をこうゆう方向に持っていきたいという引っ張っていく意味での提言のあり方と、それは向こう 5 年でやるんですけれども、既に 10 年やってきた中で醸成してきた技術の社会実証がどのようにされているのかというのがあります。時間軸がずれてきまうよね。永遠に未来の話だけをする形にするかということ、もう 10 年のキャリアがあるわけですから、2面性を持った目的を作ったらどうか、これはここで議論して頂ければ良いのですが、そうすると先程の数値目標というのがありましたよね、具体的にこれまで醸成したものが社会実証を経て、5 年後にはこうなるぞというカテゴリーのものと、もっと先を見据えてこうゆうことを振興していきましょう、これは中々、さっきバックキャストできるんじゃないかという話もありましたが、これを数値目標に入れるのは 5 年ではとても難しいかなと思います。</p> <p>そういう意味で時間軸がズレるものが 2 つあるということ、もう 1 つは名和会長が最後に言ったように札幌の振興と、地域の振興が同じですかということ、これもやっぱり北海道という地域で 2 面性がある。北海道は 6 経済圏域というのを作ってきて、実は現行で動いている今の計画もそうであって、オール北海道で何を目指すか、具体的に 6 経済圏域で、その地域に最適な科学技術の振興はどうあるのか、そのやり方と方策はどうか、という 2 本立てあるんですね。それを掛けると 4 つになるんですよね。時間軸が 2 つあって、地域が 2 つあって、それを各々組み合わせると掛け算になってしまう。それを取りまとめる形をどうするかというのを、ここで我々が議論をして、フレーム作りができれば、事務局の方でたたき台の文章作りが始まるのかなと思うんですね。今回まだちょっとそれを議論する時間は無いかなと思うんですけれども、そのフレーム作りを我々が議論して進められればと思う。具体的に今日注文があったのは、この 10 年の総括をした上で土台を組み立てましょうという話があったが、実は昨年 11 月に開催された審議会で、この 5 年間どう動いてきたかの意見交換がなされて、今日資料も皆さんのところにあると思いますが、そこを数字も含めてきちっとやって頂くのが 1 つかなと思っています。あとは、フレームが従来通り未来に向けた話だけに持っていくのか、そうではなくて、あまり計画ではそういうやり方は行政はやらないんですけども、10 年以降 15 年まで目指すことになりますので、それをどう取り組むかというのも事務局の方から出して頂ければと思います。</p> <p>ただ、具体的にですね、今日頂いた 4-2 に事務局の思いがあると思うんですけども、一番初めの今後の課題というところでは、これまでの研究成果の事業化・実用化の加速ってあるんですね、これはこれまで取り組んできたものをどれだけ社会実装できるんだと、そこをどうゆう手立てで、どうゆう方針でやるんだということは 1 つ課題として据えましょう。その次に新たな分野の研究開発の推進、これは従来の</p>

	<p>科学技術振興施策の位置づけの仕方かなと、やっぱり道としてもこれからは2つ必要となってきた、そういう手立ての目標作りを念頭に置くということかなと私は理解しているんですが、もし事務局から補足があれば。</p>
青木室長	<p>やはり1番の問題意識は、道内に北海道大学を始めこれだけ大学がある中で、そこにおける研究成果がどう道民の生活・経済のために活かされていくかということだと思います。</p> <p>それで、道の経済部には今それぞれの産業分野の振興策が用意されているわけですね、ですので事業化・出口ができればそれぞれの施策に従って振興していくと思いますので、全て大学がするわけではございませんけれども、道内における研究開発をされたシーズを事業化に結び付けていく、もちろんお金の掛かる話ですから、国の制度等も上手く活用しながらということになりますけども、今日も出口という話がありましたが、その地域の企業なりが関わった中でどうやって進めるかが大きな課題だと思っていますので、そのあたりは先程尾谷部会長が仰ったように、これまでの研究成果として出てきたものもありますので、それを社会実装・事業化する上での施策というのを1つの切り口で考えて頂ければと思っています。</p>
西岡委員	<p>親委員会での話ではない話をしようと思って、部会の方で話したいと思っていたのですが、この計画を作っていくにあたって私はこう考えるというロジックを考えています。ポジションがどうかというのは議論して頂ければ良いんですけども、世界トップレベルの研究、あるいは研究開発がやれている事業、それから今までずっと培ってきた中堅の技術になっていて、それが道内の産業ベースで受け皿になるようになっていて産業化が近いようなレベル、それからもっとベースのものでも、これは非常に北海道の産業活性について必要になってくるレベル、そういうふうなレベルの技術なり研究開発の項目をきちんと整理していく必要があるのではないかと考えています。</p> <p>例えば世界トップレベルの研究とは何かというと、陽子線治療の話があったり、生体再生医療の話があったり、医療の分野ではそういったものがあるし、それから世界トップレベルのものとしては、植物を使ったスマートセルインダストリーのようなものが具体的に北海道の中にあるんですよ。それが産業に落ちていくのは中々難しいし、5年先には難しい。10年先には何とかなるかもしれない。だから、北海道の中にどうゆうレベルの技術があるのかを明確にしておく。それは名和先生も仰ってたけども、まずきちっと現状分析したらどうか、というところに繋がっていくと思う。その時に、ここの審議会としてこのトップレベルはもっと活かすぞと、もっと広げるぞと、ここの中堅技術については大きく広げていくよと、ここのベースのここの部分についてはやるよ、というのはこの審議会のリーダーシップの部分なんです。リーダーシップをきちんととっていかねければならないので、そこはここで議論しといてもらって、分析もする、分析をした項目でメリハリをつけていく、そうするとそれは何かと言ったら中央でやるもの、地方でやるものの役割分担にもなるし、将来にわたってやるものものと、今やっておかなければならないものとの時間軸にもなると思う。1つのソリューションとして、そんなことを考えると整理がつくのかなと思っていました。そんな中で、世界トップレベルの研究なりをもっと広げていくためにはどうしたら良いかという話になったら、バックキャストの話じゃないけども、5年10年15年先の北海道のあり方を考えた時にこの程度はやっぱりいるよねという整理になっていく。今は整理の仕方の話なんですけど、そういう北海道が持っている今の研究開発、技術開発、科学技術を1回整理することで、ある程度今日の議論の部分が見えてくるのかなと、一概に資料2-4でいきなり食・健康・医療・環境エネルギー・IOT・AI・北極圏・宇宙利用とでてきているが、北海道でどれだけ広げていけるポテンシャルが</p>

	あるのか考えたときに、落ちるものもきつとあると思うんですよ。落とすものは落としていって、我々が描く科学技術振興戦略にしていくべきだと思うんですね。そうしたら産業に近いものを広げていけるし、未来を描くものも描けるし、どうゆう科学技術のポテンシャルを持っているのかを1回調べてみるべきではないかと思っています。
尾谷部会長	いかがでしょうかね。今の西岡さんが話された科学技術のレビューというのはゼロではないと思うので、そんなに大変なことではない。
西岡委員	あるいはこのメンバー、先生方から出してもらえば良いんですよ。
尾谷部会長	たぶん色々な分野の方がいらっしゃいますよね。これは将来に渡って、あるいは北海道から発信したい、あるいはもう出来るじゃないですかというものがあるとすれば、それは1回事務局の方に預けて頂ければと思う。
一入委員	当然それは将来的に産業として成り立っていくことを前提に考えなければならぬと思うんですね。つまり最終的にそれがビジネスとして成立するか、市場がどれだけの規模あるのかというのを見据えた上で見極めるというのはすごい難しいことだと思う。
菅野委員	まさにそうだと思います。僕ら民間からするとそんなことやりませんよ。その他にやるべきことがたくさんありますから。 いま大学の方いっぱいいらっしゃって、色々な研究やっていると思うんです。それはそれで良いと思っています。それはそれでやっておいて、我々業界は業界でこうゆうとこ困っている、こうゆうことしなきゃいけない、こうゆう技術が欲しいというのがあるんですよ。そうしたらこうゆう仕組みが作れるのにねっていうのがありますよ。我々も企業の課題として持っています。それをどうやって実現しようかというのと、今大学がやっていることが上手くマッチすれば良いが、それはあまり無いと思います。残念ながら。というのも研究されてる方と、我々の目標が全く違いますから、それは一緒にすることはできない。だけど、フレームがあってそこに対して一緒に力を入れていくということが重要だと思います。僕らもまた大学が何をやっているのか知りたいんですよ。それにどれだけ時間を割けるかというのもありますけども、じゃあ僕ら業界からすると何をしたいかというのと、大学では何をしているのか、何を作っているのか、そうゆうのを分かってほしい。IT業界は多岐に渡っているんで、これはうちで使えそうだなとか、そういった接点が出来れば良い。そうしたら一緒にやろうよと、特にAIなんかそうです。僕らは本当にすぐにでもやりたい。データを何百万と持っているのに、どうしたら良いのか分からない。分からないというより想像はつくんですけど、それをやる時間がないんですよ。民間ですからね。それが我々の現状です。それと大学がやっていることと上手く合うと僕は良いと思います。そうゆう場を作ってもらえとか、道が動くとか、それは有難いことだと思います。
尾谷部会長	今言われたような各論のところまではこの中では議論という話にはならなくて、まさにフレーム作りなんですよ。 これからやろうとしていることは資料2-2、具体的にはこうゆう形のものが出来上がります。そして、その中で出口なり人が見えないよなっていうものを、いかに今までより現実味を持たせられるか、というものを作ることになります。これはあくまでも科学技術振興の道としての向こう5年間の目標値なんですよ、ですので具体的な1個1個の業界における産業振興の事業化というものを今ここで議論することにはなりませんので、あくまでも出来上がるのはこうゆうフレームのものを、向こう5年間に向けて科学技術がベースになって北海道を牽引するにはどうゆう方向に向かうのかというのをイメージできるものを作ることになります。 あともう1点、もしここで事務局の方に不安みたいなものがあれば

	<p>ということなんですけども、資料 2-2 の中で、先程一番初めに目指す北海道の姿はなんですかねという話をしたんですけど、今作られているものも含め、そんなに言葉変わらないかもしれないんですけど、姿っていうのは大雑把にこうなんですよと、それに向けてっていうことで、第 6 というところありますよね、今回はここに食・健康・医療分野をエンジンにもってきましょう、もう 1 つは環境・エネルギー分野、これを大きなエンジンにもってきましょう、これによって上の方の 1, 2, 3 の目指す姿を具体化していきましょう、科学技術によって近づけていきましょうというのがストーリーですよ。じゃあ、向こう 5 年間の食・健康・医療と環境・エネルギーをどうゆうイメージ作りにするかというところですが、ここは事務局としてはどんなイメージをお持ちでしょうか。</p>
木下参事	<p>現行戦略の 6 番のところですが、地域イノベーション創出に向けた取組の戦略と書いているところですよ、今現在は基本的には作った章立てで示しているところは、策定時は地域イノベーションの戦略支援プログラムですとか、あるいは食と健康のプログラムなんかが開発されていた時期ですので、こうしたプログラムの推奨を前提として作られたというところがあります。それと条例で定めなければならない部分もありますので、その位置づけで現計画では表されていると思うんですけども、こうした分野につきましては、重点的に推進する取組の中にも入ってくると思いますし、別途ご説明することになると思いますけど、重点的に推進する推進研究分野を位置づけなければならないので、こういった部分に書き込んでいきたいなと考えているところでございます。</p>
青木室長	<p>食・健康・医療みたいなのはもともと今日の議論の中でも 1 次産業ということも多く委員の方が仰っていたので、その部分の優位性は変わらないのではと思います。それに加えて前回の戦略のときには、国から継続的に大きなプロジェクトが取れたということもあり、食・健康・医療を重点分野に据えたのだと思いますし、環境・エネルギーに関しては北海道の環境を守らなければならない、それから名和会長も仰ってましたが、北海道におけるエネルギー不足に対してどのように取り組むかということもあって、その部分は共通項として隠れやすかったのだと思っています。これから、ここを引き続き重点分野とするのか、新たな分野はどうなのだろうか、また尾谷部会長の仰るように時間軸を分けて考えるべきかどうか、というのをこの部会や審議会でも議論して頂ければと思っています。</p> <p>いずれにせよ現行戦略で重点分野と言われている部分というのは、北海道という特性を踏まえたときにもこの重点分野だったんだろうなと思っています。ただ、それだけで今後とも良いのかというのは考えなければならないところです。</p>
荒川委員	<p>ちょっと良いでしょうか。食に関連することで。</p> <p>例えばですね、高付加価値化というときに何を指して高付加価値かということで、例えば品種改良によって随分お米等は高付加価値化が進んでいるんですね、そういったこともひっくるめながら、一方で加工食品によってお金が取れるようなものを生み出していくということで、この言葉 1 つについても色んな意味合いがあって、それを本当に共通理解できているのかということで、具体的な施策になったときに方向性が定まってこなくなってしまう。したがって、現状分析をどうするかっていうことを繰り返し、何がどのレベルにあるのか、そこから先何が必要か、ということきちん共通理解を持つことが大事ななと思うんですね。</p>
尾谷部会長	<p>予定されている時間があと 4, 5 分しかありませんけども、今日のこの時間帯で伝えておかなければならないということがあれば。</p>

長谷山委員	<p>ここで何を議論するのかを明確にして進める必要があるのだと思います。</p> <p>先程の選奨のお話しは、民間でご尽力なさっておられる方を表彰するのは、産業振興などにも賞があると思いますので、他の賞について事務局からご紹介頂けると宜しいかと思えます。</p> <p>もう1つの、何を行うかについては、私のイメージとしてはKPIの話も含め、道の創生総合戦略が出ており、そこに具体的なKPI、数値目標が明示されております。その目標を理解の上で、科学技術振興戦略の計画でどのように貢献していくのか、もちろん先も見据えた加速も考えて検討するのだと思っています。</p>
一入委員	それはここでは配布されないのですか。
長谷山委員	私は、部会の委員をお引き受けして自身で調べた内容をお話し致しました。一人の委員として、開発計画もこちらから逸脱することはないのだろうと考えました。
一入委員	もし逸脱することがありえないということでしたら、資料として頂きたかったです。
長谷山委員	<p>申し訳ありませんが、持ち時間が数分とのことですので、私の話を先に進めさせて頂いても宜しいでしょうか。</p> <p>先ほどの審議会での私の発言で、何を生み出すのかが透けて見えなかったというのはそこにあります。道の戦略は当然ながら大変に多くを考えたものとなっておりますので、その全てを科学技術だけで解決できるものではありませんが、どのような所に貢献して行くものなのかが透けて見えるように、我々が議論することに焦点をあてるべきかと思えます。</p>
木下参事	<p>昨年作った戦略について、後ほど配布したいと思えます。</p> <p>そこにある中で、直接科学技術振興に結びつく指標があるかと言えば、そんなには無いのですが、全体を見据えた中で科学技術振興にフォーカスするというやり方であれば有益だと思えますので、皆様の方にお送りさせて頂きます。</p>
長谷山委員	ここでは、科学技術振興で、どのように北海道の地域振興や産業振興を加速しようとするのかについて議論することで、貢献の具体性が透けて見えるように計画が作られていくのだと考えています。
木下参事	<p>ちなみに総合戦略と総合計画は別物として、総合計画に基づいて作らないとダメなのですが、総合戦略は平成31年度までの計画ですのでそこから逸脱したものは基本的にはダメですか、細かい点が逸脱したらダメかという、そうゆうわけではなく、もっとフォーカスをかけて大きな方を取り上げるというのは可能ですので、まずは見て頂いて、それぞれご判断して頂ければ良いかなと思っていますので、繰り返しですがお送りしたいと思えます。</p>
長谷山委員	<p>もう1点よろしいでしょうか。</p> <p>私の理解ですが、科学技術振興戦略の計画が決められた後に、技術開発経費が北海道から支援されるということ意識するよりも、北海道で必要な技術が明確に提示されることで、社会が動くと考え、国や世界や企業と連携することで開発費を確保して、必要とされる技術を開発すると考える視点が良いのではないかと思います。今のような考えでよろしいでしょうか？</p>
青木室長	<p>その通りです。</p> <p>我々が例えば国に政策提案をする、予算要求をする、あるいは具体の資金を取りにいくときに、科学技術振興戦略上こうゆう位置づけにありますということの説明材料になるわけですし、一方で道の予算にも反映致しますし、それからもう1つは道が施策として取り組むだけのものではなくて、産学官連携という中で取り組んで頂くということで、皆さん共通の目的に従って取組を進めて頂くことを期待するもの</p>

	<p>でして、道の予算をとるためだけのものではありません。</p>
菅野委員	<p>先程の総合計画はすごいボリュームがあるということなんですが、科学技術に関連する部分だけ貰うわけにはいかないでしょうか。</p>
青木室長	<p>それが今日お示しした部分なんです。 ただ、ここだけ見ても全体が見えないので、全部見て頂いた方が良くと思います。</p>
尾谷部会長	<p>それでは時間が過ぎましたので、今日はですね、全員がこの作業に入る初めての人だと思うんですね、これまで何度もこれを作った人というのは含まれていなくて、全員が部会として初めてのメンバー。 そういう意味でどの基準軸で議論して、何を作っていくのかをざっくばらんに皆さんに出して頂ければ良いなということで、色々な方面から話してもらいました。 基本的にいま道がどうゆう方針を持っていて、上位にあるものを含めて、どうゆう形のをこれから作り上げていくのか、科学技術振興の目標ですね、ということをもまずは共通認識を持って頂いて、これから事務局の方から素案、たたき台がでてきますので、それで皆さんの視点で練って頂いて、5回経過した段階で審議会の方にこれを上げていくという作業を半年くらいの期間で進めさせて頂きたいと、そういう部会の運営になるということで委員の皆さんにご理解頂きたい。 宜しいでしょうか。 では、まず共通認識が持てたということで、第1回の部会の議論は終了させて頂きたいと思います。</p>